



来年1月16日に札幌市教育文化会館で上演される「ジャンニ・スキッキ」ほかがオペラでの札幌デビューとなる

北の楽人

バス・バリトン
大塚博章

天賦の低音、努力で開花

日本の歌劇界ではドラマチック・バリトンとして知られる。年に10本近い歌劇の舞台を踏むが、その多くは重要な役どころだ。最近では9月に新国立劇場で行われた歌劇「魔笛」(東京二期会公演)でザラストロ役を演じた。

2004年の「日伊音楽コンクール」で3位に入り、その後1年間ドイツに国費留学した。喫茶店で話している、見知らぬ人が思わず声の主をさがすほど魅力的な声を持ち合わせる。「産声から低かったようです。小学校時代には1オクターブ下げて歌っていたほどですから」

音楽エリートかと思いきや、かなりの遅咲きで苦勞人だ。音楽に目覚めたのが19歳の冬。「浪人時代、受験勉強に煮詰まって『運命』を聴いたのがきっかけで、音楽の才能があるのではないかと信じてしまった」。そ

こで親に内緒で受験したのが玉川大学音楽学科。「といっても文学部で、試験科目にはピアノ演奏もなければ聴音もなかった」と笑う。

大学卒業後、電機メーカーに就職。「親を安心させようと思って」と言うが、決して音楽の道をあきらめていたわけではなかった。「40歳ぐらいでオペラ歌手になつているといって『イメージ』があった」と言うとおろ、会社勤めの間も週末は音楽の練習を欠かさなかったという。その時にピアノ伴奏を手伝ってくれたのが「今の妻です」と照れ笑いを浮かべる。

3年ほどで会社を辞め、音楽の世界に船出したものの、それだけで食べていけないようになるまでにさらに5年ほど費やした。

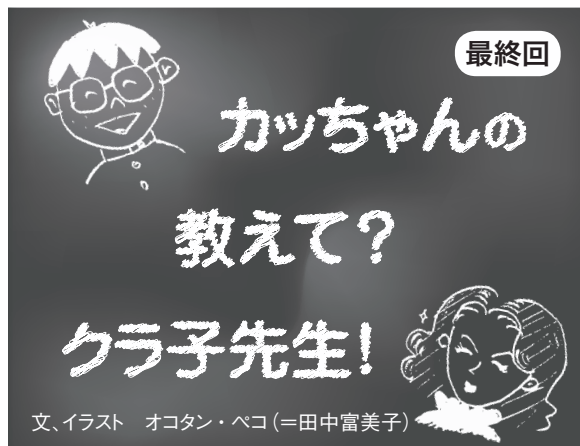
転機は2001年のびわ湖ホールでの歌劇「アッテイヤ」のゲネプロ。その声に惚れ込んだ指揮者の故・若杉弘さんに大抜擢され、世に認められるようになった。それは運だけではなく、アルバイトの傍ら地道な練習を積み、決して天賦の声を腐らせなかった賜でもある。

岩見沢市生まれの道産子。「バイロイトまでとは言わないが、ドイツでワーグナー歌手になりたいですね」とさらに大きな目標を掲げている。

(野口隆史、撮影も)

カッチャン…ある日突然クラシック音楽に目覚めた高校生。本誌編集委員某氏の若き日の姿というウワサも…

最終回



休止の音楽？

「クラ子先生、きょうは何か画期的な演奏をされるといふことですが、いったいどんな曲なんですか？」

「カッチャン、驚くわよ。世界初の試みよ。アメリカの前衛作曲家ジョン・ケージの『4分33秒』という曲を誌上演奏するの」「変なタイトルの曲ですね」

「この曲は、4分33秒の間、まったく音を出さないという休止の音楽なの。楽器の指定は特になくて、たとえばピアノで演奏する時は、演奏者はピアノの前に4分33秒間じっと座ってるだけ。それをこの『ゴースト誌上で私が演奏します』」

「でも、どうやって誌上で演奏するんですか？」

「4分33秒は秒にすると273秒。1秒を『・』1個で表します。カッチャンと『・』

クラ子先生…カッチャンあこがれのオネエサマ先生。密かにクラシック音楽ファン増加計画を企んでいる。